# アーレント『活動的生』

## 序論・第一章

上村 泰裕（名古屋大学）

# 序論

- 人間にとっての世界には、自然環境だけでなく人工環境も含まれる。p4
- 人工的世界を作り出す科学を、人間は言語で語れなくなってしまった。p5
- 言語で有意味に語れない事柄は、政治的に判断することができない。p7
- オートメーションの結果、労働社会の人間はやることがなくなる。p8
- 活動のあり方を見直すのが本書の課題。どうすべきかは政治の課題。p9

# 第一章　人間の被制約性
# 1　活動的生と人間の条件

- 活動的生は労働、制作、行為の総称。人間を制約する条件に対応。p11
- 労働は、人間が生命として生物学的プロセスを生きること。p11
- 制作は、人間が自然に逆らって故郷を作り出すこと。世界性に対応。p11
- 行為は、同じだが異なる多数の人間がともに生きる複数性に対応。p12
- 人間が作り出したものも、自然物と同じく人間を制約する条件となる。p14

# 第一章　人間の被制約性
# ２　活動的生という概念

- ソクラテス裁判。哲学者とポリスの抗争から観想的生が発見された。p18
- 哲学者は公的用務を差し控えること（scholē）を自由の条件とした。p21
- 中世には観想のための活動に。真理を前にした絶対的静止の理想。p21
- マルクスとニーチェによる価値転換後も、観想的生の優位が続く。p24
- 観想的生と活動的生を同格にしたい。統一原理に還元されない活動。p24

# 第一章　人間の被制約性
# ３　永遠と不死

- 死すべき人間。神とも自然とも違う。類の一員でなく生涯の物語。p25
- 自然は循環（春夏秋冬）するが、人間は直線（生老病死）を生きる。p26
- 人間は仕事、功業、言葉によって不滅の足跡を残せる。一等の人々。p26
- 活動的生（ポリス）と観想的生（哲学者）。地上の不死と天上の永遠。p27
- ローマ帝国の没落とキリスト教。永遠を求める観想的生が優位に。p29

# コメント

- 労働・制作・行為は、自然・物・人間を相手にする（cf.ベルの脱工業化論）。
- 地球環境・都市環境・社会環境という環境学研究科の三専攻にも対応？
- 皆で話し合って物事を決める社会。決定を実行する権力は誰が持つのか。
- 言語能力の優位。コミュニケーション嫌いはどうするのか。文系vs理系？
- 活動的生も観想的生も、労働・制作・行為のなかでは行為に分類される？